

奄美群島の旅 2021



2021年11月

旅のチカラ研究所 植木圭二

奄美群島と呼ばれる奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島に妻と二人でパックツアーを利用して行ってきた。この地域は今年の夏に世界遺産に登録されてにわかに脚光を浴びており、どの島も私にとっては初めての訪問でいい体験ができた。

序章 奄美群島に行く

■奄美群島とは

今回の私たちが使ったパックツアーの名称は「ゆっくりじっくり巡る癒しの奄美群島 4 島めぐり 5 日間」というもので、この文言の中で“奄美群島”という言葉が正確に理解している人は少ない。

奄美群島とは奄美大島を中心にした島々で奄美大島以外に徳之島、沖永良部島、与論島、そして喜界島を指す。さらに奄美大島に付属するように加計呂麻島、与路島、請島などの小島がある。

これらの島々は鹿児島県でありながら地理的には沖縄本島にかなり近い。歴史的な経緯から現在は鹿児島県になっているが、その昔は沖縄と同じ文化圏だったのである。

今回のツアーで訪れるのは奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島の 4 島で、訪問の順番は最も南にある与論島から北上する。私たちは沖縄の那覇経由で与論島に向かう。



【奄美群島の位置】

■JAL と JTA と RAC

東京羽田から那覇までは JAL (Japan Air Line) 便を利用するが、その機内設備が素晴らしい。軽量シートに AC 電源や USB のコンセント、そして大画面のモニターがあって機内エンターテインメントを楽しむことができる。

私はそのメニューに驚いてしまった。映画やテレビ番組、音楽は言うまでもないが、私が驚いたのは電子書籍と文字ニュースがあることで、電子書籍はビジネス書やハウトゥ本、旅行雑誌、さらには漫画まである。残念なことにコンテンツの数がまだそんなに多くはない。

那覇から与論島に行くのに事前にもらっていた行程表では JTA (Japan Transocean Air) 便だったが、実際に乗るのは RAC (Ryukyu Air Commuter) 便になっている。どちらの航空会社も名前だけは聞いたことがある。

調べてみると JTA はかつて南西航空と呼ばれた会社で現在は JAL の子会社になっている。RAC も当初は独立した会社だったが、JTA の傘下になった。従って JAL を親会社にして、子会社、孫会社の関係になる。そのために JAL のマイレージサービスが適用され、機体には鶴のマークで JAL と書かれている。私たちが乗る便は RAC が運行し JTA がコードシェアしているらしい。

実際に乗る飛行機はプロペラ機でカナダ製のボンバルディア DHC-8-Q400 だ。この飛行機の乗客定員は 50 人だが、ほぼ満席になっている。



その 50 人に対して CA (客室乗務員) は一人しかいない。大丈夫かと心配するが、飛行時間は 30 分もなく、機内サービスもない。

【与論空港にて 私たちが乗ってきた DHC-8-Q400】

第一章 与論島

■添乗員はおじいさん

与論空港のターミナルを出て添乗員が待っているはずだが、見つからない。

私は一瞬いやな記憶がよみがえった。それは昨年宮古島にパックツアーで行った時に置き去りにされたことがあり、それが私の脳裏をよぎった。その時はタクシーの運転手が空港で待っているはずだったが、私たちを乗せないで先に着いていたお客だけを乗せてホテルに行ってしまった。

今回はどうやら違うようで、周りを見渡すと同じツアーのバッジを付けた人たちが何人かいるから置いて行かれてはいないようだ。

そんな中、やや疲れたスーツを着た 70 才くらいのおじいさんが 40 才くらいの女性と話をしている。私は地元のタクシーの運転者かと思っていたが、よく見ると阪急交通社のバッジをつけており、どうやらこのおじいさんが添乗員らしい。人手が足らなくて OB が動員されているか、雇用延長制度なのか、真相は分からない。

他のツアー客も彼に気が付いたらしく集まってくる。そのおじいさんが点呼をとって、バスに案内される。彼は人当たりがよく、人なつっこい感じがするので、私は彼を“爺さま”と呼ぶことにした。

バスが発車して現地ガイドが話を始める。ガイドは爺さまと話をしていた女性で、明るい人で与論島生まれの与論島育ちの与論人だと言っている。彼女はほぼ丸い形の与論島を自分の丸い顔に当てはめて説明ををはじめ、現在は右耳辺りにいるという。外周は約 23km、鼻のあたりを指して最高標高は 97m、人口は約 5200 人という基本的なことを教えてくれる。

■百合ヶ浜

島に着いた早々ではあるが、まずはグラスボートに乗ってサンゴ礁の海にでる。サンゴ礁とはサンゴの集合体で、陸地と外海との間にある海面下の広い棚のような地形をいい、外海とサンゴ礁の境界は白波が立ち、サンゴ礁の部分はエメラルドグリーンになるのが一般的だ。

ちなみにサンゴは英語でコーラル、サンゴ礁はリーフと呼ばれる。この知識は 45 年前に沖縄の西表島に行った時に現地のプロのダイバーに教えてもらった。

与論島には幻の絶景と呼ばれる名所がある。それはサンゴ礁の中にできる「百合ヶ浜」という陸地で、満潮時は海面下にあって見えないが、干潮時に綺麗な砂浜が現れる。特に太陽と地球と月が一直線と並ぶ大潮の時には何十人も上陸できる広さになるという。

本日は大潮の時期だが、干潮は午前 10 時頃で、今は 15 時なので残念ながら満ち始めている。それでも小さいながらも百合ヶ浜が出現している。

船頭が上陸可能と言うので、爺さまは「上陸したい人いますか？」と聞いている。水着を着ていればともかくも、波があつて普通の服では濡れるのは必至で誰も手を上げる人はいない。

それにしても見事な青い海で、この島ではこの青を特別にヨロンブルーと呼んでいる。



【百合ヶ浜 グラスボートの舳先から撮影】

■与論民族村

与論民族村は島の昔ながらの暮らしを伝えるという目的で、御年 92 才の菊千代さんが始めた。

案内してくれるのは民族村村長の肩書で菊千代さんの息子、いや孫と思われる人で、観光客相手の説明に慣れているのだろう、非常に分かり易くそして面白い。

昔の島の生活は、自然だけで何もない。従っていろいろなものは自分たちで作る必要があり、自作の数々の生活道具がある。ゆりかご、枕はかなりの完成度だが、ネズミ捕り器は失敗作でネズミが捕れたことがないという。

住む家も自分たちで造っており、茅葺き屋根の家が並んで建っている。この地方はとにかく台風が多く、台風は風向きが変化するからそれに耐えられるように上から見ると真四角になっており、強度を増すために小さめの家を複数棟建てている。仮に屋根が飛ぶような被害にあっても一棟、二棟で被害がおさまるからだと説明してくれる。

瓦屋根の家がある。「沖縄のようですね」と誰かが声を発すると村長は待っていましたとばかりに反応する。村長曰く「沖縄と与論は別ではなく、すぐ近くなので同じ文化なのです。それなのに、この前もテレビ局が来て茅葺き屋根の家だけを撮影して行った。沖縄は瓦屋根、与論は茅葺き屋根というイメージを勝手に作っている」と憤慨している。

奄美群島全体でも鹿児島本土よりも沖縄本島の方がずっと近い。その中でも最も南にある与論島は沖縄本島までわずか 23km しかない。



【与論民族村 茅葺き屋根の家】



【与論民族村 瓦屋根の家】

■リゾート施設に泊まる

本日の宿「プリシアリゾートヨロン」はやや古いリゾート施設で私たちが泊まるコテージやチャペルはだいぶ傷んでいるように見える。

この古い施設を見ていると、この島の歴史、それも戦後の歴史が何となく理解できる。

戦後、沖縄返還前までは与論島が日本最南端の島で、上空から見るとその形から「エンジェルフイッシュの島」というキャッチコピーまでついていた。当然のように多くの観光客が訪れていたが、沖縄返還後は沖縄に主役の座を奪われた。そのために古い施設を建て替えもリホームもせずに今に至っているのだろう。

それでもコテージ以外のレストラン棟やフロントのある管理棟は白い壁がまぶしく、新しく見える。管理棟前にはちょうどハイビスカスの花が咲き誇っており、いかにも南国、そうハワイの感じで私たちを迎えてくれる。レストラン棟から見下ろす海岸がプライベートビーチになっており、白い砂浜にお洒落なベンチ、そして青い海が実に素晴らしい。背後には本物の灯台があって光を放っている。異国情緒が漂っている。

レストランの食事が全く持って素晴らしい。「グルクン（和名タカサゴ）」という沖縄の県魚の唐揚げは柔らかい身がたっぷりあって非常に美味しい。加えて地魚の刺身があって、豚肉の煮物はおそらく「あぐー豚」だろう。

景色は南国それも外国の島、料理は沖縄という取り合わせが面白い。私はこの島を好きになり始めていることに気が付く。



【管理棟とハイビスカス】



【夕食の「はにぶ膳」奥にグルクンの唐揚げ】

翌日の朝食も海を見下ろすお洒落なレストランで食べる。朝は海がキラキラと輝いているので、何を食べても美味しく感じる。本当に綺麗な海で白い壁の建物が映えている。この光景に私はエーゲ海の島を思い起こしてしまう。



【プライベートビーチ】



【ビーチの見える朝食のテーブル】

夕食も朝食も美味しく、雰囲気は抜群に良い。

そんな環境に居ながらも私たち夫婦の話題は、爺さま、つまり添乗員のおじいさんの年齢に話が及んでいる。どう見ても70才前後だが、そんな年齢の添乗員は私たちの過去の旅行ではお目にかかっていない。一体何才なのか、正規の添乗員なのか、推理は尽きない。

■ミコノス通り

その爺さまの点呼で本日の与論島の観光が始まる。

まずは「ミコノス通り」をバスは走る。この通りの名前はギリシャのエーゲ海に浮かぶミコノス島に由来していると今日も明るいガイドが説明してくれる。実はミコノス島のミコノス市と与論町は姉妹都市になっている。その締結は沖縄返還から10年ちょっと過ぎた1984年のことだ。国際交流という表向きの理由以外に、人気挽回策の一環で観光地として刷新し、エーゲ海の風を入れたかったのだろう。以来、両島間では交流が行われ、与論島ではギリシャ風の建物やモニュメントを造り、その通りを「ミコノス通り」と命名している。

ガイドの話ではミコノス通りをスタート、ゴール地点にした「与論マラソン」というマラソン大会が毎年開かれている。そのコースは日本陸連公認コースになっているが、与論島は一周約23kmなのでフルマラソンでは2周しないと行けない。同じ道を2回走ってもつまらないので2周目は逆回りをするという珍しいコースになっている。さらに制限時間が7時間と長いので景色を見ながらのんびり走ることができるという明るいガイドが自慢している。

長距離歩き旅を趣味にしている私の場合、7時間あれば42.195km歩けそうな気持ちになる。いや半分でも一周するので、これはお勧めかもしれない。

■サザンクロスセンター

高台にあるサザンクロスセンターにやってくる。

サザンクロスとは南十字星のことだ。ここから南十字星が見えるからそう命名されているとガイドが説明する。私は彼女に「南十字星の上の3だけで、一番下は見えないのではないの？」と質問すると、彼女は「私は見たことないですが、4つ全部見えている写真がありますよ」と明るく返ってきた。

私が南十字星を日本国内で見た最北端は小笠原の父島で、その時は上の3つの星しか見えなかった。父島とほぼ同緯度の与論島もそう予想したが、実際に4つの星が揃った写真が飾ってある。微妙ではあるが確かに一番下の星も見えている。父島の緯度は27.100度、与論島の緯度は27.029度なので与論島の方が若干南にあり、さらにこのサザンクロスセンターは島の最高標高97mの近くで5階建てなので条件は良い。それほど微妙な位置にあるようだ。

そもそも日本国内で南十字星を見ることができると知っている人は少ない。これは良い観光資源だろう。



【南十字星の写真（十字は加筆）
手前には鳥居と土俵の屋根】

サザンクロスセンターの近くに与論城跡があってここからの眺めも良い。山城なので敵がやって来るのを見ることが必須だったからだろう。

城の敷地内には神社が2つと相撲の土俵もある。2つの神社は地主（とこぬし）神社と琴平神社で、地主神社の側面に向かって琴平神社が建っている。

赤崎鍾乳洞にやって来る。ここでは専門の案内人が付いて説明してくれるのがありがたい。これが団体旅行の良いところだろう。

赤崎鍾乳洞は全長約 120m と比較的小さな鍾乳洞で、1965 年に日本大学の洞窟探検部によって調査された。それまで島民は鍾乳洞の意味も、その価値も知らなかった。そのため入口の鍾乳石は入り易くするために無残にも何本も折られている。

鍾乳洞内で約 800 年前の人骨が出てきたという。案内人が言うには風葬の跡だと言っている。風葬とは、死体を埋葬せずに空气中にさらして自然に還すもので、世界的にも腐敗が早い暖かい地方で多く見られ、日本でも奄美や沖縄で行われていたという。

ガイドはいつも与論島が一番と強調しているが、ここは控え目に沖永良部島には大きな鍾乳洞があるから、その予行演習と言っているのが印象的だった。



【赤崎鍾乳洞の入口付近 折られた鍾乳石】

第二章 沖永良部島

■ 兄貴分の島

フェリーに乗り、2 時間半で沖永良部島に到着する。

港にはバスが待っていて早速乗り込む。与論島のバスに比べて、大きさも質も一段階アップしている。そしてガイドはポッチャリ系からスレンダー系に代わっている。年齢はアラフォー（アラウンド 40 才）のままだが、眼鏡をかけているためか知的な感じがする。

沖永良部島の面積は与論島の約 4.5 倍、ガイドの話ではこの島は与論島の兄貴分ということでこんな話をしてくれた。沖縄は 1429 年に琉球王国として統一される前は、北山、中山、南山と 3 つの国に分かれていた。最も北にあった北山の国の王子の一人が沖永良部島を治め、その弟が与論島を治めていた。それゆえ島民も与論島の兄貴分という感覚があるという。

バスは国頭（くにがみ）小学校にやって来る。この学校の体育館には開校 123 年という大きな看板が架かっており、校舎の前には第一回卒業生が記念に植えたガジュマルの大きな樹が生い茂っていて、日本一のガジュマルを名乗っている。

そのガジュマルを見るためなのか分からないが、この小学校を 2017 年（平成 29 年）に当時の天皇皇后両陛下が行幸啓（ぎょうこうけい）で来校したという。行幸とは天皇が外出（旅行）することを言い、幸啓は天皇以外の皇族の外出なので、天皇皇后一緒の場合は行幸啓と呼ぶと、知的なガイドはなかなか詳しい。

その時の様子をガイドは細かく話してくれたが、とにかく凄かったという。3週間くらい前から全国から警官が400人くらいやって来た。人数にも驚くが、皇宮警察も来島しており初めて本物の白バイを見る島の子供たちは感激していたという。それがきっかけで警察官を目指そうとガイドの子供は猛勉強していたというから、その影響力は計り知れない。

そしてその時の行幸啓は沖永良部島に2泊して与論島は日帰りだったというからガイドの鼻息は荒い。



【ガジュマルの樹 「天皇皇后両陛下下行幸啓の碑」が正面にある】

小学校の近くの海岸にある潮吹き洞窟「フーチャ」は波や風で浸食されてできた洞窟で、強風時には潮が吹き上げられる。その吹き上がる潮が高く広範囲のために近くの農作物に被害を与えるので、かつては4つあった洞窟を3つ埋めて観光用に1つだけ残したという。

絶壁から海を眺めるとウミガメを見ることができるとガイドが言うので、のぞき込むと幸運にもウミガメが泳いでいた。そして爺さまが「私たちは持っていますね」と言っている。

笠石海浜公園にやって来る。公園のある和泊町の町の花が鉄砲百合なので、その形をした展望台の建物が印象的で眺めが良い。公園内には小さな風穴があって、ここも風葬跡と書かれている。

広い芝生の広場と野外ステージがあって、ストックを使ってウォーキングする島民が数人いる。「お元気ですね」と声を掛けると「私たちは歩こう会だよ」と教えてくれた。ガイドの話ではこの公園で人に出会ったのは初めてだと言うが、その他に小さな子供連れの親子もいたから、「私たちは大歓迎されていますよ」と、また爺さまが言っている。

鍾乳洞「昇竜洞」にやって来る。全長3.5kmのうち600mを一般公開している。与論島のガイドが与論のものは予行演習だと言っていた意味が良く分かる。全長で与論の鍾乳洞の約30倍もあるのだからやはり兄貴分だけのことはある。入ってみると確かに大きい。それにしてもこんな小さな島にこれほどの鍾乳洞があるとは驚くばかりだ。

鍾乳洞から出ると少し雨が落ちてきており、本日最後の観光が鍾乳洞の中というのが幸いする。するとまた爺さまが「私も持っていますね」などと言っているから、実に楽しい。そんなウイットに富んだ会話から、爺さまはもう少し若いのかもしいないと思いはじめ。



【昇竜洞の入口付近】

■国民宿舎に泊まる

今夜泊まる宿は公営国民宿舎「おきのえらぶフローラルホテル」で、フローラルパークという公園に併設されており、外観はお洒落に造りになっている。天皇皇后が行幸啓で泊まった宿で、そのために3部屋を繋げて特別室を作ったという。

そんな宿ならばさぞかし素晴らしい部屋だと思って鍵を受け取って入室するが、我々庶民が泊まる部屋は6畳一間の質素な和室でやや拍子抜けする。まあ普通の国民宿舎、それもひと昔前のものと言っていい。

大浴場はあるが、隆起サンゴ礁の島なので温泉は出ない。しかしサウナが併設されており、サウナ大好きな私にとっては何よりもありがたい。

食事は全体的には良いが、インパクトが無い。それは与論島の夕食のグルクンのようなメインの料理がないからなのだろう。料理にしても何にしても“これが売り”を作らないといけないだろう。

食事のテーブルでたまたま同席した夫婦と話す。Sさん夫妻としておこう。夫妻は全国を旅しており、ニューヨークにも住んでいたとのことで国内外の旅の話題で大いに盛り上がる。

私たち夫婦が爺さまの年齢当てをしていることを伝えると彼らも一枚加わった。私は68才に一票、妻は70才、Sさん夫妻も同じくらいと言っている。

■雨と風の日

沖永良部島のこの日は朝から雨、そして風が強い。個人旅行ならばこんな日は外での観光はしないが、団体旅行の場合はそうはいかない。

爺さまは長靴に履き替えて張り切っている。心が折れそうな天候なので、せめて張り切っているように見せているのかもしれない。その前向きさが、なかなかいい感じで憎めない。

本日最初の観光は田皆岬にやって来るが、断崖絶壁の岬で東シナ海からの風雨にさらされ観光どころではない。傘は逆さになり横殴りの雨は防ぎようもなく、こんな状態でも観光するのかと思いつつ、岬を眺めて早々に戻って来る。

次は「世之主の墓」を訪れる。幸いにして風雨は多少弱くなってきている。

立派な琉球式の墓で、14～15世紀にこの島を治めていた世之主加那志（よのぬしがなし）のものだという。琉球石灰岩の岩壁に横穴を掘り込み遺骨を納める部屋を設けて、前方には庭があって庭の周りに石を積んで壁にしている。このような墓はトゥール墓と呼ばれており、奄美群島で最大規模だとガイドは教えてくれる。



【世之主の墓 正面の岩壁の扉の中が納骨の部屋】

標高 180m にある越山公園を訪れる。晴れていれば眺望抜群で島内を一望できるようだが、今はそうはいかない。

ここで興味深い碑が私の目に留まった。それは「日本復帰記念の碑」で、戦後のある期間はこの地域の島々は米国領で、その後に日本復帰を果たしたと記されている。

碑に書かれた内容とガイドの説明によると、1945年に終戦になったが翌年2月に奄美群島と沖縄が米国統治になり、日本本土との渡航が全面禁止になった。正確には北緯30度以南全てなので、その時の日本は屋久島までということになる。それが8年後の1953年に奄美群島が返還され、沖縄が返還されたのは1972年だ。

恥ずかしながら、私は奄美群島のその歴史を知らなかった。言い訳をすると、1953年はまだ私は生まれていなかった。それにしても奄美に来て知らないことが実に多い。

ウジジ浜公園は景勝地で、波に浸食されてできた奇岩が面白い。浜には丸いパチンコ玉くらいの軽石が多く打ち寄せられている。この軽石は最近のニュースで話題になっており、小笠原近くの海底火山の噴火で大量に放出されたものが、海流に乗って沖縄や鹿児島島の海岸にたどり着いて船の運航の障害になっているという。

海底火山による“いたずら”は他にもある。この島はハブがいないことを知的なガイドがその理由を説明してくれる。

奄美群島ができてから火山活動や地殻変動で島が水没と隆起を繰り返し、陸上の動物は絶滅し、そのためハブもいなくなった。島が大きく標高が高い奄美大島や徳之島は水没しなかったためハブが生き残った。ハブ以外にも多くの動物が生き残り、その中には今では貴重な絶滅危惧種も多い。

その絶滅危惧種が生息するがゆえに、奄美大島と徳之島は今年の夏にユネスコの世界遺産に登録された。残念ながら沖永良部島と与論島は入っていない。

子牛のセリが行われているという場所を通過する。この島では子牛を生ませて育てるが、成牛になる前に島外に出荷してしまう。成牛に育てるのは松坂や神戸などで、ブランド牛になる。ガイドの話ではこのバスの運転手も子牛を育ててセリに出しているという。

あとで運転手と話す機会があり、いくらくらいで売れるのかと聞くと、子牛一頭の相場は70万円位だという答えが返ってきた。

■西郷隆盛と奄美群島

風が強いためフェリーが遅れるという情報が入り時間調整のために「西郷南洲記念館」に立ち寄る。もちろん行程表には載っていない。

西郷南洲とは西郷隆盛のことで、彼がある時期に奄美大島に流されたことは有名な話だが、その詳細はあまり知られていない。この“南洲”とは西郷隆盛の雅号で、このことからこの島では西郷を敬っていることが分かる。

1858年、西郷たち薩摩藩は幕政の改革をしようと謀ったが、逆に幕府に追われた。薩摩藩は幕府の追手から西郷を隠すために西郷三助と改名させ奄美大島に潜居させた。西郷は島の子供の教育を依頼され、島の娘を妻にめとって子供も生まれた。もはや別人として生活しており、現代でいう田舎暮らしを楽しんでいたのかもしれない。

ところが1862年、薩摩藩は西郷の力が必要になり、幕府に発覚しないように大島三右衛門と改名し鹿児島に戻した。しかし復帰した時には藩主が代わっており、西郷とそりが合わず西郷の行った行動が藩主の逆鱗に触れ、今度は薩摩藩によって徳之島へ流された。

西郷は奄美大島を経て徳之島に到着し、少しの間そこで生活した。ところが藩主は家老たちが西郷を徳之島に在留という軽い処罰にしたことを知り、沖永良部島へ移し牢に閉じ込めると厳命して約2か月後に西郷は沖永良部島へ移送された。

当初、沖永良部島では牢が貧弱で風雨にさらされ健康を害した。

記念館の前にはこの時の牢が復元されている。



【復元された当時の牢】

しかし人格者で、人脈もある西郷の待遇は徐々に改善され、健康を取り戻した。来島まもなく始めた塾も 1864 年には教え子は 20 名程になった。島役人のための心得を説き、本土各地の仲間との情報交換は欠かさず行っていた。

この頃になると急速に薩摩藩は中央への影響力が増してきたが、そのため人材不足が最大の課題になっていた。それを打開するために大久保利通らが藩主を説得し西郷を召還することになり、1864 年蒸気船「胡蝶丸」が沖永良部島に迎えに来た。その後のことは多くの人が良く知るところだろう。

つまり西郷は 6 年に渡り奄美大島、徳之島、沖永良部島で過ごした。最南端の与論島に行かなかった理由は、与論島には薩摩藩の代官所がなかったからだ。西郷南洲記念館の館長が教えてくれた。

この島では西郷以外にも多くの政治犯や思想犯も流されており、西郷も含め彼らが島の子供たちに学問を教えた。そのため明治時代には多くの小学校が開校しており、ガジュマルで有名な開校 123 年の国頭小学校もそのひとつになる。

■ 爺さまの憂鬱

風雨によってフェリーの到着が遅れるので西郷南洲記念館に立ち寄ったが、遅れだけではなく入港する港も変更になった。“表の港”に着くはずが、“裏の港”になったという。

この表の港や裏の港という表現を私は初めて聞く。爺さまに聞くと、小さな島は別としてある程度のサイズの島ならば定期船が着く港を 2 つ持っており、風や波の状況によって使い分けている。通常使う港を表の港、そうでない方を裏の港といい、2 つの港は離れているのが一般的だと。本日は表の港の和泊港は太平洋側で風が強い、そのため東シナ海側の裏の港の伊延港を使うということになったと説明してくれる。

港が変更になることはよくあるので常に気にかけていないといけない。それも添乗員の仕事だと爺さまは言っている。

さらに爺さまは船が接岸しても係留するロープが投げられるまで安心できないと言っており、それは過去に苦い経験をしているからだ。かつて船が埠頭に接岸しようとしたが風と波が強いために接岸を諦めて、係留ロープを投げずに立ち去ったことがあったという。

今回幸いにもロープが投げられ、爺さまは胸をなでおろした。天気予報によれば今回の旅行は風が強い日が続くようで、爺さまの憂鬱も続きそうだ。

ちなみに、このように寄港を取りやめてパスすることを“抜港”と言う。爺さまやガイドが「バッコウ」と言っていたが、私は最初理解できなかった。

フェリーに乗り込む。出航して沖に出るとやはり揺れている。それでも 1 万トンクラスの船なので船酔いまでには至らない。

第三章 徳之島

■徳之島は面白い

多少の船揺れはあったがなんとか徳之島に着く。今宵の宿は徳之島の繁華街にあり、小雨になっているので夕食までの時間を使って街に繰り出す。

私たち夫婦の旅は国内・海外問わず、土産物や食料、酒の調達のために地元のスーパーマーケットに行くことが常で、今回奄美群島に来て初めてスーパーマーケット立ち寄ることになる。店はそんなに大きくはないが、品数は結構豊富だ。品物の値段は一般的に島外から入って来たものは高いが、それに比べて島内産のものはかなり安い。

徳之島産の黒糖焼酎「島のナポレオン」が島民の間では人気だと店員が教えてくれたので購入する。900mlで690円と値段も手ごろで、もちろん味もお勧めだ。本土の酒店ではお目にかかったことがない銘柄だ。

翌日の朝、雨はおさまったが風は相変わらず強い。

待っていた観光バスに乗り込むと、またしてもバスはグレードアップしている。ガイドも現地ガイドではなく制服を着たバスガイドに代わっている。年齢は変わらずに今度もまたアラフォーだ。

ガイドの話では徳之島は与論島の約12倍、沖永良部島の約2.6倍の大きさである。大きさもさることながら、この島は島民のエネルギーで溢れていると自慢している。それを簡単に言い表すキャッチコピーがあって、それが「闘牛と長寿と子宝の島」である。

まずはキャッチコピーの最初の“闘牛”を行う闘牛場「なくさみ館」にやって来る。ドームの屋根を持つ本格的な円形闘牛場でかなり大きい。本日は試合こそしていないが、運よく闘牛の稽古をしている。その稽古を見せてもらったが、迫力たっぷりだ。実は私は生まれて初めて本物の闘牛を見る。

爺さまも驚きながら「私も初めて見ましたよ。いつもは牛と一緒に写真を撮るぐらいなのに、今日は本当にラッキーですよ。皆さんも私も持っていますね」と興奮気味に言っている。



【闘牛場「なくさみ館」 闘牛の稽古風景】

そして次の“長寿”については有名な人がいる。この島で生きていた「泉重千代」さんは、114 才の時に長寿世界一でギネス世界記録に認定され、そして 120 才で亡くなった。

その「泉重千代記念館」に立ち寄る。彼の 120 年の人生や食生活が紹介されている。その中で「長寿の十訓」があったので紹介しよう。

- 1、万事くよくよしない
- 2、腹八分か七分がよい
- 3、酒は適量ゆっくりと
- 4、目覚めたとき深呼吸
- 5、やること決めて規則正しく
- 6、自分の足で散歩に出よう
- 7、自然が一番 さかわらない
- 8、誰とでも話す 笑い合う
- 9、歳は忘れて考えない
- 10、健康はお天とう様のおかげ



【泉重千代さんが生活していた部屋】

温暖な気候と島特有のゆっくりとした時間の流れでストレスのない生活が長寿を生んだことは十分に理解できる。

さらに長寿は彼だけではなく隣の集落の「本郷かまと」さんも、116 才まで生きたというのでこの記念館で紹介されている。彼女は「2 日寝て 2 日起きるおばあちゃん」ということで有名になったと書かれている。

バスは阿権集落というところを走っている。少し向こうの高台に推定樹齢 300 年というガジュマルの樹がある。こちらも長寿だ。いや、待てよ。沖永良部島で開校 123 年の小学校のガジュマルの樹が日本一と言われていたが、それを遥かに上回っている。

どちらも日本一なのだろうか。善意に解釈すれば沖永良部島の小学校は人為的に植樹をしたもので日本一、こちらは自然に生えたもので日本一ということかもしれない。

最後の“子宝”については象徴的な出来事がある。1976 年に五つ子が生まれたというニュースが報じられて日本中で話題になったが、実はそれは徳之島とは無関係で、それから 4 年後にこの島でも五つ子が生まれた。あまりニュースにならなかったのが全国的には知られていないが、島民は皆知っているという。

五つ子は特別な例だが、この島は子供が非常に多い。徳之島には 3 つの町があるが、その 3 つの町で全国の子供の多い自治体ランキングのベスト 3 を占めたというから本物だ。

■島の西部、北部

徳之島の西海岸には景勝地が多い。

犬田布（いぬたぶ）岬は東シナ海に突き出た断崖絶壁の岬で、ここに戦艦大和慰霊塔がある。慰霊塔の高さは大和の司令塔と同じ 24m で、下から見上げるとかなり高い。

しかし何で戦艦大和なのかと疑問になる。

広島県呉市の戦艦大和ミュージアムに行った時に戦艦大和が沈んでいる場所は鹿児島県枕崎市の西南西約 200km と聞いており、徳之島からはかなり離れている。そのことをガイドに聞いてみると、戦艦大和の元乗組員の証言で「徳之島西二十海里洋上に轟沈」という記録が残されていたために、1968年にこの島の最南端に慰霊塔が建てられた。

正確な沈没位置はそのだいぶ後に判明したから、しょうがないかもしれない。それにあれだけ立派のものを今さら撤去できないのだろう。

犬の門蓋（いんのじょうふた）という場所には隆起サンゴ礁が波や風の浸食で削られた奇岩がある。この中でも有名なのは「めがね岩」で、この写真は徳之島の紹介でしばしば使われる。



【犬の門蓋のめがね岩】

さらに岬周辺を散策すると奇岩が多い。キノコのような大きな石、岩場には無数のトゲのように突き出た岩もあり、そこで釣りを楽しむ人もいる。



【犬の門蓋の奇岩群 右の写真の上の方に釣り人がいる】

ムシロ瀬は花崗岩の奇岩が連なる。ムシロを敷き詰めたように見えるのでこの名前が付けられたと言われ、隆起サンゴ礁の海岸が多い徳之島では花崗岩は珍しいとガイドが説明してくれる。確かにその光景はまるで外国、いや別の惑星のようにも思える。



【ムシロ瀬の花崗岩の奇岩群】

島の北西部には 2000 年シドニーオリンピックの女子マラソンの金メダリスト高橋尚子が練習したという場所があり「尚子ロード」と記された記念碑がある。

昼食はその記念碑の近くにある「ホテルサンセットリゾート」のレストランで食べる。

長距離陸上練習のために島にやってくるこのホテルに泊まった学校や実業団の色紙が壁いっぱい貼ってある。そして本日もまたそんな合宿中の学生たちが昼食を食べている。

ちょうどテレビでは大学駅伝の中継をしており、学生たちだけでなくレストランの従業員も一緒になってテレビに見入って応援している。仕事そっこのけの熱の入った応援で、買い物会計をしようとしていた私は待たされることになるが、何故か催促する気になれなかった。島民たちもマラソンや駅伝が大好きになっていることが、なんだか嬉しくなる。

バスが走り出し「アマミノクロウサギに注意」の道路標識がある。アマミノクロウサギは絶滅危惧種で徳之島と奄美大島でしか見られない。とは言っても夜行性の動物なのでこの旅では一度も見ることにはなかった。

夜行性と言えは猛毒のハブもそうだ。

「金見岬ソテツトンネル」はソテツの林で、その中の通路を歩くようになっている観光名所だ。看板にはハブがでるかもしれないので通路の真ん中を歩くようにと書かれている。ハブも夜行性なので昼間は草むらに入り込まなければ危険はないらしいが、ツアー客たちは緊張して通路の真ん中を歩いている。見事なまでの一列縦隊が実に面白い。

■フェリー

順調に観光を重ねていたが、強風のために本日の奄美大島行きフェリーは裏の港に入港するとの情報が入り、島の反対側にある平土野（への）港に行くために最後の訪問予定地が取り止めになる。さらに爺さまの話ではこれからやって来るフェリーは強風のために与論島を抜港したという。

フェリーありきでスケジュールが組まれているので、もしも私たちが与論島にいたならば、いったいどうなったのだろうか。そんな心配をしていたら爺さまは「その場合は与論島に2泊して沖永良部島を飛ばして徳之島に渡ります」と言う。さらにバスガイドが「私の娘が、奄美大島に2泊3日で部活の試合に行った時にも船が欠航して4泊5日になりましたが、追加の費用は一切請求されませんでした。島ではそんなことは日常茶飯時で相互に融通しあっています」と付け加えた。

フェリーに乗ってSさん夫妻と話す。2日前の夕食で一緒になった旅行好きの夫婦で、何故か北海道のお勧め宿などの情報交換が始まる。私が長万部の四国屋が温泉と料理がいいと言うと、岩内の高島旅館は漁師がやっている宿で食事が抜群に美味しいなど切りがない。

そして再び爺さまの年齢当てに話が及ぶ。

第四章 奄美大島

■奄美大島は大きい

奄美大島の名瀬港に着く。私がイメージしていたよりもかなり大きい港で、今まで寄港した港は桟橋までタラップで降りたが、ここではターミナルビルの2階から乗船下船用の連絡通路が出てきて雨風を防げる。

島の大きさは与論島の約35倍、沖永良部島の約7.6倍、徳之島の約3倍と、奄美群島では最大で日本の島の面積ランキングでも上位にある。その正確な順位は、本州、北海道、九州、四国、択捉島、沖縄本島、国後島、佐渡島、そして奄美大島になる。一般的には本州などの4島と沖縄本島、それに北方領土は除くので、実質は日本で2番目に大きい島だ。

人口は奄美群島全部で約12万人、その約半分は奄美大島に住んでいる。

既に暗くなっておりホテルにチェックインする。小さいながらも大浴場、そしてサウナもあるのがありがたい。

■世界遺産

本日は旅行最終日になる。ホテルを出てバスに乗る。大きい奄美大島なので観光バスも大きくグレードアップされ、ついでにバスガイドの年齢も体重も大きくアップしている。

このツアーにおける奄美大島の目玉は世界遺産だ。今年の夏に「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」がユネスコの世界遺産に登録された。もちろん自然遺産で、登録理由は「絶滅危惧種の生息域でもある生物多様性」になる。

同じく今年の夏に私も世界遺産検定の1級の資格を取得した。従って私にとってこの世界遺産見学は今回のツアーの目的の一つになっている。

世界遺産は遺産保護のために核心地域（コアエリア）、緩衝地帯（バッファゾーン）を設けることになっている。残念ながら昨日行った徳之島では、私たちは核心地域には入っておらず、緩衝地帯をバスで通過しただけだ。

本日は核心地域の「金作原（きんさくばる）原生林」に入る予定になっている。

世界遺産に登録されたためだろうか金作原に行くには専門のネイチャーガイドの同行が義務付けられており、ホテルを出て金作原の入り口で、ネイチャーガイドと合流する。そのガイドの運転する車の後を私たちの観光バスが続くことになり、バスガイドの話では金作原に向かう道路が狭いためには観光バスが走る前に小型車が先導する必要があると言う。

確かに道は狭い。バスと小型車がすれ違うにも苦労しており、バス同士がすれ違う場合にはどうするのか、老婆心ながら心配してしまう。

金作原は奄美大島の山々の中でも天然の亜熱帯広葉樹が多数残っている。今にも恐竜が現れそうな雰囲気だと宣伝文句では書かれているが、私たちはそんな凄い場所に行く準備をしていないので、広い道を約40分間散策する。それでも映画ジェラシックパークに出てきそうな雰囲気だ。



【金作原の亜熱帯広葉樹林】

ネイチャーガイドの説明は分かり易く、話もなかなか上手い。国の天然記念物に指定されているルリカケスやアマミノクロウサギなどはいつでも見ることができる訳ではないので、それらの写真や鳴き声などをタブレット端末で見せてくれる。

今回は旅行会社がネイチャーガイドを付けてくれたが、私が個人で訪問していたら頼まなかっただろう。ついでに立ち寄った程度ならばともかく、これが目的ならば多少費用がかかっても頼まないといけないと思うようになった。これも世界遺産検定のおかげかもしれない。

世界遺産とは人類が未来に残す普遍的価値がある自然や建造物で、せつかく現地に来るのだからそれを少しでも理解したいもので、旅はそれによって深みが増すはずだ。

■奄美は名ランナーを生む

名瀬運動公園でネイチャーガイドと別れる。この場所には 2004 年アテネオリンピックマラソンで金メダルをとった野口みずきの記念碑がある。その碑には、彼女はここ奄美大島で練習を積んでいたと書かれている。

それにしても与論島の与論マラソン、徳之島の高橋尚子の尚子ロード、そしてここ奄美大島でも野口みずきとは恐れ入ってしまう。奄美群島はランナーたちにとってそんなに魅力あるところなのだろうか。

島の大きさや高低差、車の交通量、温暖な気候と条件がそろっているのは理解できるが、これを本当に理解するためには実際に走ってみたい気持ちになってくる。

■昼食、そして最後の観光

昼食は「ばしゃ山村」という海辺の洒落たレストランで食べる。南の島の田舎の雰囲気、素朴な感じがなかなか良い。

最終日の昼食だけはツアー代金には入っていないので各自自由に食べることになり、妻は「鶏飯」を注文する。鶏飯とは、ほぐした鶏肉、しいたけ、錦糸卵などをご飯の上へのせ、鶏ガラスープをかけて食べる郷土料理で、今回泊まったどのホテルでも朝食で出されていた。私もそれにしようかと思ったが、山羊カレーという他では食べられないような料理が目に入る。島の至る所で山羊がいたことを思い出し、山羊カレーを注文する。

カレーは山羊の肉と野菜がたっぷり入ったスープカレーで、味はなかなか良い。山羊の肉は臭みもなく柔らかい。鳥のモモ肉のような食感がする。

カレーを食していると、Sさん夫妻がニヤニヤしながら私たちのテーブルに近づいてくる。ニヤニヤの理由は爺さまの年齢を聞いたからだと言っている。

何と 1961 年生まれの 60 才ということだ。私よりも 5 才も若い、そして年齢当ては全員ハズレ、それも大ハズレだ。

この年齢当てゲームは当然本人には伝わっていないが、人間は若い方に間違えられるのは嬉しいが、逆はあまり喜ばない。私は心の中で爺さまに手を合わせ、あやまった。

“あやまる” ついでに奄美大島の北端近くにある「あやまる岬」にやって来る。とは言っても“謝る”の意味ではなく、岬の地形が島の少女が遊ぶ「綾に織られた手毬」のような形をしているので、「アヤのマリ」が由来だと説明看板に書いてある。

奄美十景に選ばれており景色がいい場所らしいが、本日は曇り空なので全体的にいまひとつだ。それでも展望台からは喜界島が大きく見える。

展望台の下には立派な公園がある。ここには海水プール、広場、ちびっこゲレンデ、サイクル列車、パターゴルフ場などいろいろな施設がある。本日は月曜日であり人はいない。



【あやまる岬の展望台から公園を見る】

ここにもソテツジャングルがある。バスガイドはソテツの種を持ち帰って植えると芽が出ると言っている。2年くらいで芽が出て、実が生るまで20年だという。

肥料として鉄分が必要なので釘などの鉄と一緒に埋めるとよいという。ソテツは“蘇鉄”と書くので鉄で蘇るそう。さすがバスガイドは年の功だ、一同納得する。

爺さまが最後の点呼をとって私たちは奄美大島を後にする。おっと、私よりも5才も年下の彼をまたしても爺さまと呼んでは申し訳ない。

申し訳ないか・・・、だから最後の観光が「あやまる岬」になっているのか。

終章 旅の記録

■旅の記録

実施は2021年11月4日（木）～8日（月）の4泊5日、その行程を以下に示す。

- ・第1日目羽田空港発 8:50→那覇空港 11:45、那覇空港発 13:00→与論空港 13:40、
中型観光バスにて麦屋魚港に行きグラスボートにて百合ヶ浜見物（上陸せず）、

その後「与論民族村」見学、「プリシアリゾートヨロン」にチェックイン
宿のレストランで夕食

- ・ 第2日目宿を9:00に出発、バスにてニコノス通り、焼き物工房「あーどうる焼 窯元」、赤崎鍾乳洞、与論城跡、琴平神社と地元神社、サザンクロスセンター、与論港からフェリーに乗り弁当の昼食、沖永良部島和泊港に入港、観光バスにて国頭（くにがみ）小学校でガジュマルの樹を見学、潮吹き洞窟「フーチャ」、笠石海浜公園、鍾乳洞「昇竜洞」を見学、「フローラルホテル」チェックイン、宿のレストランで夕食
- ・ 第3日目宿を9:30に出発、バスにて田皆岬、越山公園、世之主の墓、ウジジ浜公園、フローラルホテルで昼食、沖永良部酒造、西郷南洲記念館を見学、伊延港からフェリーで徳之島の亀徳新港に入港、ホテルの送迎バスで移動、「ホテルグランドオーシャンリゾート」にチェックイン宿のレストランで夕食
- ・ 第4日目宿を9:30に出発、バスにてドーム闘牛場「なくさみ館」、泉重千代記念館、犬田布岬（戦艦大和慰霊塔）、犬の門蓋（いんのじょうふた）見学、「ホテルサンセットリゾート」で昼食、ムシロ瀬、ソテツトンネル、金見崎展望台、朝潮太郎記念像を見物、平土野（へとの）港よりフェリーに乗り弁当の夕食、奄美大島の名瀬港に入港、「ホテルビッグマリン奄美」にチェックイン
- ・ 第5日目宿を7:30に出発、観光バスで金作原（きんさくばる）に行き40分間散策、大島紬村見学、レストラン「ばしゃ山村」にて昼食、ソテツジャングル、あやまる岬を見学、奄美大島空港発15:00→羽田空港16:55にて帰宅

総費用は夫婦二人分の合計で約37万円になり、一人当たり約18.5万円になった。詳細は以下に示す。

- ・ 阪急交通社に払い込んだ費用179580円×2（初日と最終日の昼食以外は全て食事付き）
- ・ 初日と最終日の昼食2回分 約5000円（2人分）
- ・ 羽田空港までの交通費、飲み物、土産など 約5000円（2人分）